

2025 年度 昭和大学 (I 期)

【 講 評 】

- 1が文法・語彙・語法問題、2、3が、長文総合問題という形式は 2020 年度入試以降変わっていない。
1は、4 択の文法・語彙・語法問題 15 問。基本的にレベルは標準だが、問 1 のように、受験生があまり見たことがないような慣用表現の問題も出ている。8 割は正解したい。
2、3は、長文問題。比較的読みやすい英文であり、客観問題は比較的解きやすいが、記述問題は解答がまとめ難い問題である。記述問題の対策を行ってきたかどうかで、得点の差が出るだろう。

【 解 答 ・ 解 説 】

1

- [解答] 1. C 2. C 3. C 4. C 5. B 6. B 7. B 8. A 9. D
10. A 11. B 12. B 13. C 14. A 15. D

[解説]

1. The kids were playing with toy cars, water guns, and what (have) you all afternoon.

「子供たちは、玩具の車、水鉄砲、その他いろいろな物で、午後の間ずっと遊んでいた。」
and what have you は、「などなど」、「その他いろいろ」と言う意味の慣用表現。

2. After a long, stressful day, a warm bath feels absolutely (heavenly).

「長く、ストレスの多い一日の後では、温かいお風呂は、天国のように感じられる。」
feel+形容詞で「～に感じられる」と言う意味になるが、選択肢の中で、形容詞は heavenly だけ。
happily/wonderfully/calmly は全て形容詞+ly なので、副詞である。

3. I thought my phone was on the dining table, but it was on the coffee (table).

「私の電話はダイニングテーブルの上にあると思っていたが、コーヒーテーブルの上にあった。」

A.の it は、修飾語を添えることができない。B.の that は後ろに修飾語を添えることは可能だが、前には添えることができない。D.の one は、可算名詞の反復を避けるために用いるが、dining table のように、dining (名詞)+table(名詞)の複合語は、dining table で 1 つの名詞として捉えるので、the dining table の後で one を用いると、one は dining table を表すことになる。したがって、the coffee one とすると the coffee dining table を表すことになり、おかしな意味の表現になる。

4. What do you (say) to trying out that new restaurant downtown?

「試しに街中のあの新しいレストランに行ってみたらどう？」

What do you say to Ving～？「～してはどうですか？」

5. I don't recognise (some) of the books on the shelf. In fact, I'd say nearly half are ones I've never heard of.

「本棚の本の一部は、見覚えがないよ。実際、だいたい半分は、聞いたこともない本だよ。」

後ろの nearly half are ones I've never heard of と言う表現から、本棚の中には見覚えがない本が含まれていることがわかる。any を選ぶと「見覚えがある本が 1 冊もない」ことになり、後ろの文の内容と矛盾する。

6. Ken is trying to cut down (on) sweets because he is on a diet.

「ケンはダイエット中なので、お菓子を控えようとしている。」

cut down on～ 「(消費、支出など)を減らす、控える」

7. Some friends of (his) are also coming to the housewarming party next week.

「彼の友達も何人か来週の新築祝いのパーティーに来ます。」

所有の意味と a/ this/ that/ these/ those/ some/any/ every/ no を名詞に添える時は、所有格は使えず、
a/ this/ that/ these/ those/ some/any/ every/ no [名詞] + [of] [所有代名詞] と言う形になる。

ex. this my pen…×、 my this pen…×、 this pen of mine…○

8. The (late) Professor Smith was admired by his colleagues and students.

「故スミス教授は、同僚や学生に称賛された。」

the late~/one's late ~で「故～」と言う意味を表すことができる。

9. We didn't win the game, but this wasn't the reason (that) I left the team.

「私たちは、その試合に負けたが、それは私がチームを去った理由ではなかった。」

空所以降は the reason の説明をする節なので、関係代名詞節が、関係副詞節だが、空所以降の節には名詞の位置は空いていないので、関係副詞が入る。reason を先行詞にする関係代名詞は which または that、関係副詞は why または that である。

10. The race will be held in Tokyo and Yamanashi on February 14 and April 13, (respectively).

「レースは、東京と山梨で、それぞれ 2 月 14 日と 4 月 13 日に行われます。」

respectively は「それぞれ」という意味の副詞。

11. Everybody in this class, (regardless of) their previous experience, has got a high score in the TOEFL test.

「このクラスのみんなが、以前の経験とは無関係に、TOEFL で高得点をとった。」

[()+their previous experience] が副詞句を作っているので、()には、副詞である C. の nonetheless や接続詞である D. の although は入らない。A. の despite of は「～にもかかわらず」、B. の regardless of は「～とは無関係に」という意味である。意味が通るのは、regardless of である。

12. Art is (no less important a subject) in education than science, as it encourages creativity and critical thinking.

「芸術は、科学に劣らず、教育では重要な科目である。創造性と批判的思考を助長するので。」

no less 形容詞/副詞～than…は、「…に劣らず形容詞/副詞～」、「…同様形容詞/副詞～」。

no 形容詞/副詞の比較級～than…は、「～と同様形容詞副詞～でない」。

意味が通るのは前者である。

13. A brief overview will (do) for this meeting; we'll cover the details next time.

「今回のミーティングでは、手短な総括で十分です。詳細は次回に扱います。」

will do 「(目的に対して) 十分である」

14. The company (will release) the app to the public when the final version becomes available.

「この会社は、そのアプリの最終版が利用可能な状態になったら、アプリを一般に公開します。」

空所には動詞が入るので、B.の releasing(動名詞か現在分詞)と D.の to release(to 不定詞)といった準動詞は入らない。when 節が「未来」を表す副詞節なので、主節は will release がよい。

15. Emi: I can't join you for dinner tonight; I have a prior appointment.

Matt: (Okay, fair enough.) We can catch up another time.

エミ 「今夜は一緒に食事できないわ。先約があるわ。」

マット 「いいよ。仕方ないね。また今度ね。」

fair enough (相手が提示したことが許容範囲であることを認める時に用いる) 「まあいいよ/仕方ないね」

2

[解答] 1. 3番目 another/ 8番目 connection/ 10番目 all

(It is another that science has no connection at all to what we should believe～)

2. ア. in イ. of ウ. with エ. of

3. (I) B (II) D (III) B (IV) B (V) C

4. 理論と検証結果が一致したとしても、それが、その理論が正しいことを意味するのか、単にその検証結果と一致しているだけなのかどちらであるかは確信できないから。

[解説]

1. この文が、第一文の It is a popular myth that～と対応していることに気づけば、It is another (popular myth) that～と言う形であることがわかる。

2. ア. go hand in hand 「密接に関わっている」

イ. fall short of～ 「(基準、期待値)に達しない」

ウ. deal with～ 「～を扱う」

エ. representative of～ 「～を代表する」

3. (I) science is (I): that we can either be 100 percent certain ~or we are completely at sea….
- コロン以下で、「100 パーセント確信が持てるか、完全にわからないかのどちらかだ」といっているので、空所には all or nothing が入る。
- (II) our knowledge is (II) because it is always subject to revision based on future experience.
- because 以下で、「常に、未来の経験に基づいて見直される。」と述べているので、空所には open-ended 「終わりのない、結論が出ていない、変更可能な」 がよい。
- (III) if we are ~ and are basing this hypothesis on the data that we have examined so far, we are making a rather large assumption that future data will (III) to what we have experienced in that past.
- この文では、「過去のデータに基づいて、仮説を立てているならば、その前提として、未来のデータは、そのような過去のデータと (III) するという考えがある」ということを述べている。conform (conform to～「～と一致する」) を入れると、意味が通る文になる。また、この文の後にある、Just because all of the swans we have seen in the past are white, this does not preclude the existence of a black swan in the future. (「過去に見たハクチョウの全てが白色だからといって、未来のコクチョウの存在を排除するものではない。」) は、「未来のデータが、過去のデータと一致する」と言う前提を否定するための具体例である。
- (IV) ~, (IV) the indefinably small relationship between the size of the sample of the world we have examined so far compared to the size of the set of possible experience we may have in the future.
- (IV) 以降の構造は、
- (IV) the indefinably small relationship

between the size of the sample of the world [(which) we have examined so far]

compared to the size of the set of possible experience

[(which) we may have in the future]
- となっており、(IV) + [名詞] + [前の名詞の修飾語句] となっている。この構造を作るのに適切な選択肢は、A.の前置詞 for (ただし、「というのは～だから」という意味では for は接続詞)、と B.の given 「～を考え合わせれば、～を考え合わせて」 である。意味が通るのは given である。
- (V) How can we be sure that the sample of the world we have seen so far is representative of the rest of the world? Just as we cannot be sure that the future is going to be like the past, (V).
- 「今までに私たちが見てきた世界のサンプルが、世界の残りの部分の典型例だとどうして確信できようか? (いやできまい。) 未来が過去のようになると確信できないのとまさに同じように、(V)。」
- (V) に選択肢 C. we cannot be sure that the piece of the world we have met in our limited experience can tell us anything at all about what it is like elsewhere (「私たちの限られた経験で出会ってきた世界の一部によって、他の場所では世界はどのようなものかについて、知ることがで

きるということは確信できない。」)を入れると、直前の文(「今まで見てきた世界のサンプルが、世界の残りの部分の典型例だとは確信できない。」)を言い換えた文になる。

4. 下線部を詳しく言い換えた文が、[3]段落の最終文、But even when a theory is consistent with the evidence, we can never be sure that this is because the theory is true or merely because it has worked out so far. (「理論が証拠と一致する時でさえ、それが、理論が正しいからなのか、単に、そこまでは、理論が通用しただけなのは、決して、わからない。」)である。したがって、この文をもとに解答をまとめるべきである。

3

[解答] 1. (IV)

2. ア. it イ. sun

3. an

4. D

5. (被験者の神経細胞の発火を観察することで、どのようなカテゴリーの単語が、どのような順序で聞こえたかはわかるが、)聞こえた具体的な単語が何かはわからなかったということ。

6. 単語の音ではなく、意味のカテゴリーごとに特定のニューロンが発火し、これは人々に共通であるとわかった。それにより、ニューロンの発火を直接観察することで、聞こえた単語のカテゴリーがリアルタイムで分かるようになった。

[解説]

1. He was impressed that the researchers could determine not only the neurons that correspond to words and their categories, but also the order in which they were spoken.の入る箇所を指摘する問題。この文章からわかる情報は、①He が指す人物が、直前の文に書いてあること、②the researchers の説明がすでにあること、そして③the order in which they(= words) were spoken についての説明が、前にあるか、または、直後にあることである。これらの条件を満たしている部分を選ぶ。the order in which they were spoken については、[10]段落の the order in which the words appeared の箇所でしか言及がない。しかも、[11]段落には、Vikash Gilja という He で指すことができる人物が登場する。したがって、問題となっている英文は(IV)に入る。

2. ア. it is ~ that…の強調構文(分裂文)である。

イ. 'son'と言う単語に対して、the two words having an identical sound(「二つの単語が同じ発音する」)と言っているので'son'の同音異義語が答えである。

3. an unique opportunity の unique[ju:ní:k]は、半母音で始まっていて、母音で始まっていないので、an を a に直すべきである。

4. Words with (i)の具体例として、'mouse'と'rat'が示されているので、(i)には similar(「似ている」)が入り、(ii) word pairs の具体例として、'mouse' and 'carrot'が示されているので、(ii)には random(「ラン

ンダムな、任意の、でたらめな」)が入り、(iii) words の具体例として、‘above’ and ‘behind’が示されているので(iii)には relational(「相関的な、関係性を示す」)が入る。

5. they couldn't recreate exact sentences の意味を説明する問題。特定のカテゴリーの単語が聞こえた時に、特定のニューロンが発火するので、どのニューロンが発火したかを観察することで聞こえた単語のカテゴリーはわかる。しかし、その発火によって、「聞こえた単語が具体的に何かはわからなかつた」ということが説明されればよい。

5. 要旨とは、反復的に述べられたことをまとめたものである。本文で反復的に言われていることは、

①ニューロンの活動(発火)をリアルタイムで監視する

- monitoring the brain of living people
- look at how individual neurons encode language in real time
- watching their neurons fire
- Recording directly from neurons
- understanding language at its natural speed

②聞こえた単語の意味のカテゴリーによって、特定のニューロンが反応(発火)する

- the similarity between the words that activated the same neuronal activity
 - The words that the same set of neurons responded to fell into similar categories
- duck と egg、 mouse と rat、 above と behind の例

③この分類は、人々に共通のものである。

- across individuals, the brain uses the same standard categories
- The categories that the brain assigns to words were similar between participants.
- human brains all group meanings in the same way

④これらのニューロンは、単語の音ではなく、意味に反応

- ~didn't distinguish words by their sounds, only their meanings
- son と言う単語の例

⑤聞こえる単語の大雑把な意味が、リアルタイムでわかる

- ~was able to determine what people were hearing
- ~ could tell, for example, that a sentence contained an animal ~ and the order in which the words appeared
- the researchers could determine not only the neurons~ and their categories, but also the order in which they were spoken

の5点である。これらの内容をまとめればよい。

お問い合わせは 0120-302-872

<https://keishu-kai.jp/>